

# 以汉字为媒介的新词传播

## —近代中日间词汇交流的研究

漢字を媒介にする新語の伝播  
—近代中日間語彙交渉の研究

刘凡夫 樊慧颖/著



辽宁师范大学出版社

**IS** 辽宁师范大学学术文库

# 以汉字为媒介的新词传播

——近代中日间词汇交流的研究

刘凡夫 樊慧颖/著

辽宁师范大学出版社

· 大连 ·

© 刘凡夫 樊慧颖 2009

图书在版编目 (CIP) 数据

以汉字为媒介的新词传播：近代中日间词汇交流的研究 / 刘凡夫, 樊慧颖著. —大连：辽宁师范大学出版社，2008.12

ISBN 978-7-81103-798-2

I. 以… II. ①刘… ②樊… III. 词汇-对比研究-汉语、日语  
IV.H363

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2008) 第 192927 号

---

出版人：程培杰  
责任编辑：于志杰  
责任校对：陈伟荣  
封面设计：王尚楠  
版式设计：方力颖

---

出版者：辽宁师范大学出版社  
地 址：大连市黄河路 850 号  
邮 编：116029  
营销电话：(0411) 84206854 84215261 84259913 (教材)  
印刷者：大连金华光彩色印刷有限公司  
发 行 者：辽宁师范大学出版社

---

幅面尺寸：145mm×210mm  
印 张：15.25  
字 数：322 千字

---

出版时间：2009 年 4 月第 1 版  
印刷时间：2009 年 4 月第 1 次印刷  
书 号：ISBN 978-7-81103-798-2

---

定 价：32.00 元

## 前 言

借词在民族语言的形成、发展过程中一直起着重要的作用，借词研究是语言研究中一个不可忽略的领域。同属汉字文化圈的中日两国语言长期以来以汉字为媒介频繁交流，特别是19世纪后期以来的词汇交流更是你中有我，我中有你。这种交流究竟是怎样发生的，其呈现出怎样的演变过程，对两国语言的发展起到了什么样的作用，目前的研究成果还不是很多，相对于语言研究的其他领域，这一领域的研究还是比较薄弱的。

本书是以汉语中的日语借词为对象，从社会与文化背景、语言内部与外部的关系等方面考察了日语词汇传入汉语的时期、方法、过程以及在汉语中词形、词义的变化，并探讨了日语借词对现代汉语词汇体系的影响。为了更好地展开研究，本书将近代中日间的词汇交流划分为汉语与日语词汇的早期接触期，日语词汇的大量流入期以及日语词汇的消化、吸收

期。主要通过 19 世纪末至 20 世纪初中国学者、留学生的著作、译作、辞书以及具体的词与构词成分，来分析中日间词汇的相互借用关系，研究的重点放在日语词汇的大量流入期及消化、吸收期。

第一阶段的早期接触期为 1840 年至 1895 年，中日两国在此期间由于接触西方近代文化，分别创造了大量的新词语，这些新词语又以汉字为媒介在中日两国间移动。该时期流入汉语的日语借词主要散见于少数学者、外交官、商人所写的访日见闻录、报告书之中。明治维新以前访日的罗森，在其所著《日本日记》中已经出现了不少关于日本物产、风俗方面的日语借词。明治维新以后，访日的中国人开始增多，有关介绍日本的见闻录也多起来。从明治维新到中日甲午战争这 20 余年中，在访日中国人所著的各种资料里，借用了大量的日语词汇。这些词汇中不仅有表示日本固有的物产、风俗方面的词汇，还有反映明治维新以来时代变化的新词、译词。特别是在黄遵宪所著《日本国志》中不仅可以看到如“广场”“消防”“体操”“宪政”“投票”这样的原词借词，还能看到很多如“传播”“方法”“意见”“保释”“规则”这样的回归借词。但这些资料在中日甲午战争之前并未被人们认识到它

的价值，资料中的日语借词也没能引起人们的注意。

第二阶段的大量流入期为 1895 年至 1919 年，是近代中国以日本为窗口接受西方近代文化的时期。本书通过被当时的知识人广泛阅读的《饮冰室合集》初期资料、《译书汇编》、《日本游学指南》这三种风格各异资料，考察了日语借词传入的途径、方法以及词汇上的特征。日语借词传入的时期与途径，主要源自 19 世纪末至 20 世纪初中国学者、留学生的翻译、著述活动，但在《饮冰室合集》初期资料中发现，梁启超在戊戌变法前的著述中已经使用了不少日语借词，这些日语借词主要来自于黄遵宪《日本国志》的影响。在借用方法方面除直接借用外，还有在日语借词后加注释，使用日语借词的同时后附汉语译词，使用汉语译词的同时后附日语借词等。

这一时期的日语借词主要体现以下特征：

1. 不仅借用了日语汉字字音词，还有用汉字书写的外来词、日语固有的词汇。

2. 词性上以名词为主，还包括动词、形容词、副词和构词成分。

3. 数量上汉字字音词占绝大多数，在这些汉字字音词中，

回归借词主要为二字汉字字音词，原词借词多为三字汉字字音词。

4.从借用领域来看，《饮冰室合集》初期资料与《译书汇编》中，主要为表示抽象概念的学术词汇，《日本游学指南》开始由学术词汇向一般生活用语扩展。

第三阶段的消化、吸收期为1919年至1936年，来自于日语的借词，在20世纪初期达到了数量上的顶点，经过“新文化运动”“五四运动”开始逐渐下降，进入对已经流入的日语借词进行消化、吸收的阶段。本书通过1915年出版的《辞源》与1936年出版的《辞海》考察了作为外来词融入汉语词汇体系的过程及其自身发生的变化。在《辞源》中可以看到，所收日语借词不仅有学术名词，还包括大量的生活用语，多达百分之四十的日语借词为汉字书写的外来词和日语固有词汇。为使读者理解，编著者必须要为日语借词逐个加以注释，并注明来自日语。到了1936年出版的《辞海》，情况发生了很大的转变。首先是《辞海》中学术名词的比重提高，生活用语的比重降低了。其次是汉字字音词的比重提高，汉字书写的外来词和日语固有词汇减少了。最后是除部分表示日本特有文化的词汇外，其他的借词都不再注明来自日语了。与

《辞源》相比,《辞海》所收日语借词在现代汉语中的定型率是非常高的,说明日语借词传入汉语后,经过数十年接收、淘汰、消化的过程,到《辞海》问世之际,基本上已经固定下来了。

本书还在第八章、第九章分别对表示教师意义和表示学生意义的二组词、在第十章对构词成分“~者”进行了词汇交流史上的考察。对第八章、第九章的二组词,通过词源的追溯、新词语创出与移动的分析,考察了中日间相互的借用关系,以及在相互借用过程中发生的词形与词义的变化。对第十章中的构词成分“~者”,通过对文献资料的发掘与分析,考察了“~者”在中日两国语言中由构词成分向生产性接词的转变过程,以及词汇交流对这种转变的影响。所发掘与分析的文献资料包括以往被人们所忽略的鸦片战争后在华出版的英华辞典等洋学资料、幕末·明治初期的日本资料以及清末中国留学生的论著、译著等。

本书最后认为,拥有同一文字书写形式的中日两国语言,在近代发生的词汇交流是两国摄取西方文化的产物。日语借词传入汉语,首先要受到政治、社会、文化等语言外部诸要素的影响,同时还要受到语言内部规律的制约。接收日语借



词的过程就是摄取外来文化与汉语内部的反应由对立到统一的过程，这个过程有吸收也有淘汰，到完全消化需要数十年的时间。其对立与统一的结果，被融入汉语词汇体系的日语借词丰富了汉语的语言表现，使汉语的构词方法更加多样化，同时，对现代汉语词汇体系的形成也发挥了积极的作用。

在本书出版之际，谨向恩师加藤正信先生表示衷心的感谢。20余年前，在日本东北大学留学时代，加藤正信先生就对本研究从方法论到文献资料的发掘给予了多方位的指导。离开东北大学后，恩师一直关注着本研究的进展，并经常赐予宝贵的意见。正因如此，本研究才能最终得以完成。还要衷心地感谢原日本东北大学村上雅孝教授、创价大学佐藤亨教授，二位老师多年来一直关心着本研究的进展，不仅在学业上给予了极大的关怀与支持，还提供了很多宝贵的资料和信息，使著者增强了完成本研究的信心。

本书的研究于2005年获批为教育部人文社会科学研究专项研究项目（项目批准号：05JD740046），经过几年的努力，终于完成了。在本书出版之际，著者的心情是既高兴又有些忐忑不安，因为面对着浩瀚的史料与复杂的词汇现象，难免会有很多失误。因此，衷心期待着大家的批评与指正，同时

也期望本书的研究成果对发现语言发展过程中的一般性规律，阐明以汉字为媒介的汉字词在不同语言间的传播过程有一定的参考意义，对中日两国的近代语研究、词汇史研究、文化交流史研究有一定的参考价值。

本书的出版得到了大连市政府学术专著资助项目及辽宁师范大学学术专著资助出版基金的资助。在本项目研究过程中还得到了日本住友财团亚洲地区日本关联研究基金的资助，在此表示衷心的感谢。

著者

2008年10月

## 前書き

本書は、近代中日間に発生した語彙交渉を、主に中国語の立場に立ち、日本語から中国語に入ってきた語彙を社会的、文化的背景、言語内部と外部の関係の面から、受容の時期、方法、定着するまでの過程を探り、その語形・語義上の変化及び近代中国語の語彙体系に及ぼした影響を研究したものである。

この語彙交渉の史実を解明するために、本書では語彙発展史の立場から、「近代」という期間を、三つの段階に分けている。第一段階は1840年から1895年までで、日本語語彙との早期接触期とし、第二段階は1895年から1919年までで、日本語語彙の大量流入期とし、第三段階は、1919年から1936年までで、日本語語彙の消化、吸収期とした。中国語に入った日本語語彙の量的及び質的な変化から考えて、特に大量流入期と消化、吸収期を重点に置いた。中国語学者、留学生の著書・訳書、20世紀初期の代表的な中国語辞

書などの言語資料、並びに具体的な語と造語要素を通して、それに反映された借用事実及び交渉関係を考察した。なお、本書では、物理用語、哲学用語などのような高度な術語、専門語に限定するものではなく、現代中国社会の言語生活を支える必要な語彙を対象にした。

第一段階の早期接触期に、言語の借用を引き起こした社会的、文化的背景に着眼し、西洋の近代文明の受け入れに伴って、新語の創出および漢字を媒介にする新語の中日両国間での移動について論じた。この時期に中国に入った日本語の語彙は、訪日した中国人学者、外交官及び一部の商人の書いた見聞録や報告書に散見する。明治維新以前に書かれた羅森の『日本日記』に、日本独特の文物、制度を表す語以外に、中国語が必要とし、借用する可能性のある語はまだ非常に少なかった。日本独特の文物、制度を表す語についても、中国人一般の日本に対する無関心が原因で、実際には借用が行なわれなかった。

明治維新以後、特に『中日修好條規』が締結された後、訪日した中国人が増え、日本滞在中の所聞所見を記録したものも増えていた。これらの資料には、体系的に日本を研究するものは少なかったが、日本の地理、歴史に触れ、明

治以来の日本の政治制度、文化教育、経済、法律などを紹介する面では、当時の日本を理解するには貴重な資料である。

明治維新から中日甲午戦争までの20数年間、訪日した中国人より書かれた諸資料には、多量の日本語の語彙が用いられている。また、日本独特の文物、制度を表す語が記録されたほか、「汽車」「郵便」「製紙」「政治」「電信」など明治維新以来の時代と世相の変化を反映した新語・訳語も使われた。これらの諸資料の中で、特に取り上げるべきものは黄遵憲の『日本国志』である。1880年から1887年の間に著された『日本国志』に、「広場」「消防」「体操」「憲政」「投票」のような原語借用語のみならず、「伝播」「進歩」「営業」「方法」「意見」「保釈」「規則」「刑法」のような回帰借用語も多く見られる。

早期接触期の日本に関する諸資料は、中日甲午戦争の終わりまで、その価値を正確に認識された中国人が非常に少なかった。外来の文化に無関心であった当時の社会背景では、いうまでもなく日本語語彙を生かす土壤がなかった。結局、これらの資料にある日本語の語彙は資料自身と同じように、一般の人に知られず、語彙体系に影響し、中国語

への溶け込みはほとんど不可能であった。

1894年から1895年の中日甲午戦争をきっかけに、中国人の日本観も、外来文化への態度も大きく変えられ、日本を通して西洋文明の摂取は時代の流れになった。近代中日間の語彙交渉は第二段階の大量流入期に入った。

大量流入期にそれぞれ『飲氷室合集』初期資料、『訳書彙編』、『日本遊学指南』という当時の知識人に広く読まれ、性格の違う資料を対象に、日本語語彙の受入れ経路、方法及び語彙の特色に考察を加えた。

中日甲午戦争以後、日本から中国に入ってきた語彙が複雑な様相を呈している。「戊戌変法」以前、近代の啓蒙思想家である梁啓超はすでにその論著に日本語語彙を使っていた。これらの日本語語彙は早期訪日した外交官、学者の書いた書籍を通して、間接的に受け入れたものである。そのうち、黄遵憲の『日本国志』から受けた影響は大きかった。「戊戌変法」の後、日本に渡った学者、留学生が多くなり、彼らは日本滞在中に、直接日本語の影響を受け、日本語の語彙を積極的に自分の著書、訳書に使うようになった。梁啓超の『飲氷室合集』初期資料に422語の日本語語彙が用いられていたが、来日前の資料に使われたものが70語

で、来日後の資料に新たに使われたものは352語に上った。また、早期留学生の翻訳雑誌『訳書彙編』に376語、著書『日本遊学指南』に192語も使われていたことが、本書の調査で判明した。

日本語語彙の受け入れ方として、そのまま借用するほか、中国語に既にあった訳語を使って、その後日本語の訳語を小文字で付け加えたり、日本語語彙のあとに中国人の作った訳語で意味を説明したり、割注を施して解釈したりするなど、色々と工夫したものがある。最初は学術著書、訳書類に日本語語彙が多用されていたが、次第に『日本遊学指南』のように、一般書籍にも日本語語彙が多く用いられている。

三つの資料に用いられている日本語語彙の性格は、語種から見れば、漢語のほか、漢字表記の外来語、和語もあり、品詞から見れば、名詞のほか、動詞、副詞、造語成分の接辞もあった。漢字字音語は圧倒的に多く使われていたが、これらの漢字字音語には、回帰借用語は二字語が多いのに対して、原語借用語は三字語が多数を占めている。分野別で見ると、『飲氷室合集』と『訳書彙編』では、抽象的な概念を表す学術用語を中心に用いられていたが、『日本遊

学指南』になると、学術用語から一般の生活用語へ広がり始めた。

上述諸資料に使われた日本語語彙が中国語への定着率は非常に高く、『飲氷室合集』初期資料に用いられた日本語語彙の81%、『訳書彙編』の84%、『日本遊学指南』の81%がなお現代中国語に使われている。定着若しくは淘汰された原因を検討して、中日両国の学問分野に共通性のあるもの、特に漢字字音語が定着しやすく、日本独特の文物、制度を表す語、非漢字字音語は定着しにくいのである。

20世紀の10年代を頂点に、新文化運動・五四運動を経て、中国における日本語の受容は下降線をたどり始めた。量的な受け入れから、すでに流入してきた日本語を消化、吸収する形となっていた。この消化、吸収期に、それぞれ1915年に刊行された中国語辞書の『辞源』と1936年に出版された中国語辞書の『辞海』を取り上げて、外来語として中国語辞書に収められた日本語語彙の様相、及び中国語の語彙体系に溶け込む過程に発生した変化を検討した。

言葉の変化は言うまでもなく国語辞書の編纂にも影響している。近代中国の初めての国語大辞書である『辞源』の語彙を見れば、多くの日本語から入ってきたものが収めら



れていた。これらの日本語語彙は、品詞上、名詞のほか、動詞的語彙、副詞的語彙もあり、語種上、漢字字音語のほか、和語、漢字表記の外来語もある。『辞源』に収録された日本語の語彙は、新概念、術語だけではなく、日本語の在来語彙や生活用語も多く含まれている。これらの語彙を読者に理解してもらうために、編纂者は注釈をつけ加えたほか、各語にそれぞれ出自の注記が施していた。これはある程度日本語語彙が中国語辞書に浸透する早期の実態を反映している

しかし、『辞源』に収録された日本語語彙は中国人読者に馴染まないものが多く、現代中国語への定着は非常に低いのである。『辞源』正編・続編初版に収録された日本語語彙は合わせて216語があり、もし、地名、年号などを表す固有名詞23語を除けば、今日の中国語に定着したのはわずか3分の1弱に過ぎず、3分の2以上が淘汰されてしまった。淘汰された理由は、非漢字字音語はもちろん中国語に定着しにくい、たとえ漢字字音語であっても、造語法、用字法が違ふと中国語の抵抗があつたと考えられる

1936年に刊行された『辞海』は当時中国の最大の国語辞書であり、『辞源』よりはるかに多くの日本語語彙が収録され